教化・教育・錬成

三枝樹正道

近頃、錬成とか修錬とか云ふ語が教育作用に關聯して盛んに用ひらるゝやうになつた。而もそれは多くは學校を離れた、寧ろ學校外の教育作用に就て用ひらるゝのであつて、訓練訓育と云ふ語に內容が極めて類似して用ひられてゐるのである。德川時代初期には教化と云ふ語が用ひられたものであるが、これは寧ろ今の教育と云ふ語の前身である。今これらの語義の變遷を考察して、吾國現時の教育の目的とする點を述べて見たいと思ふ。

さて『教化』と云ふ語はカナリ古い語であるが謂ゆる字引の上に現れたのは寶永五年三月刊行の『大增字萬寶節用集』にあるものを始めとせねばならぬと思ふ。又『教育』と云ふ語が字引の上に出たのは更に下つて文政九年三月刊行の『倭節用悉改大全』である。而してこれらの文字は各々異つた意味內容を有してゐるのである。勿論これらの語はその當時既に一般に用ひられてゐたものである。それでこそ字引にも採擇せられたものである。

まづ『教化』と云ふ語は『教育』と云ふ語と等しく支那から渡來した文字ではあるが、吾が國に於てこれが最初に用ひられたのは『日本書紀』卷第五にある、崇神天皇が四道將軍を御選任御派遣遊ばさるゝ時の詔書に

『民を導くの本は教化(おしへおもむくる)に在り。今既に神祇を禮ひて災害皆耗きぬ。然るに遠荒人等猶正朔を受けず、是れ未だ王化(きみのおもむけ)に習はざるのみ、其群卿を選びて四方に遣して朕が意を知らしめよ。』

とある文字であらう。これはその意を按じ奉るに御稜威の德化感化と云ふことを意味するものであらう。その後平安朝を經て江戸時代と下つて教化と云ふ語は漸く多く用ひらるに至つたものであるが、そこでは儒教の謂ふ道德的感化の意味と佛教に云ふ宗教的傳道の意味の二通りに使用されたものである。前者の場合にはこれを『けうくわ』と訓じ後者の場合には『けふげ』と訓じてゐるのである。然もこれらは何れもその對象は必ずしも未熟なる少年兒童のみでなくして一般の民衆もその中に含めてゐるのである。而して又中江藤樹の「翁問答」(上卷之本)にある如く、

「むかしは胎教とて、胎内にあるあひだにも、母德の教化あり。いま時の人は至理を知らざるが故に、おさなきうちには、をしへなきものなりと思へり。教化の眞實を知らずして、たゞ口にていひをしへるばかりを、おしへと思ふよりおこりたるまよひ也。根本眞實の教化は德教なり。くちにはをしへずして我身をたてみちを行ひて、人のおのづから變化するを德と云ふ』

と云つて自己修養し、自ら素行を愼んで他人にその德化を及ぼすを教化と云つてゐるのである。此點眞に教育の基本要項を洞破すると共に、教化の極めて自然的なる作用であることを物語るものである。即ち教化とはその教育作用に於ける主體客體共に修養の過程にあるを本來の相となし、其間に自然任運に感化德育の行はるゝ現象を云ふのである。從つて教化に於て最も重要な要素であり、地位にあるものは、その教化の主體となるべき人の人格である。道德的感化にしても、宗教的傳道にしても、いかに立派な格言を並べても、又いかにあり難い教法を說いても、これらは

總べて、その人の人格を通じて始めて客體に感化の及ぶものであつて、萬一人格に不純なものがある場合には反つて反對の結果を齎す場合さへあるのである。

教化はかく廣く一般社會民衆を對象として行はれたものであるが、德川中期以後に至つて横着者を勘當して、謂ゆる五人組制度の峻嚴な共同責任を回避せんとする者が簇出して社會に親權者の無い子供が多く現るゝと云ふ奇異なる現象を呈して來たのである。茲に於て幕府は『不孝之子取計之事』に關する法度を規定して(慶安三年)子女の育成をその親に強要してゐる。而して更に寛政八年七月の町觸には『子弟ニ教育ヲ盡シ一族和合致シ帳外者無之樣可致旨申渡』を出して、子弟の育成を各家庭に於て充分に徹底せしめようと念願したのである。而して同時に「教育」なる語を公文書の中に始めて用ひて來たのである。即ち茲に從來の教化とはその內容に於て異つた要素を包含する「教育」と云ふ語を用ひて來たのである。

抑も「教育」と云ふ語は、これ亦前述の如く教化と同樣支那渡來の語ではあるが、吾國に於て國語の中に用ひられたのは山鹿素行の「治平舊事」(卷之四)に

「德立則人倫明也。父ニ母天下ニ教ニ育海內ヲ一其功久而長」

とあるを始めとするのである。その後常盤潭北の「民家童蒙解」(卷下之二)に

『如斯にして生質の美醜は論に及ばず、若しその身正しからずんば、子の教育は何とも云ふべからず。これ子を育る道によりて、其身を修め人を修る道を得るなり』

と出てゐる。かくて漸次教育と云ふ語か民間にまづ一般化して用ひらるゝ樣になつたのである。而して寛政の公文

書に採用さるゝことゝなつたのである。此間に吾人は『教育』の『教化』とは異つた意味内容を發見するのである。それはこの教育作用の客體即ち對象が、特に子供になつて來たことである。換言すれば伸びゆくもの生長しゆくものを育成助長することを特に新術語「教育」で以て表現せんとしてゐるものであることを知る。

かくて山家素行の場合に於ては、未だ孟子の「教育」の意味、又は從來多く用ひられた「教化」と大差なく用ひられ、恰も一家の中に於ける父母の如く天下即ち國家に於て、親として、その國内の未熟なる國民を教へ育て立派に薫化することは、誠にその功たるや實に大なるものがあるとの意味であるが、この常盤潭北になれば正しく教育を將來性ある、生長の途上にある子供に對する育成指導となしてゐるのである。而して更にこの民家童蒙解には別に教化の語をも使用してゐるのである。（巻三、附錄）而してそれはむしろ改過遷善の德化薫化を意味するものであつて單に子供のみならず一般人をもその對象としてゐるのである。

かくの如く「教育」なる語は、伸びゆく子供の育成に限つて用ひらる言葉であり、「教化」は一般人の陶冶に關して用ひられたものである。從つてその内容に於ては、「教育」にあつては特にその對象である兒童の心身の發達が重要點をなすものである。即ち伸びゆくものへの「教化」を特に教育と云つたものである。これに對して教化は社會教化の文字がよくその意味を現してゐる樣に一般社會人を對象としてゐる。

而して「教育」はその後幕府は教育本位政策によつて武士の子弟に對しては藩黌の教育、庶民の子弟に對しては寺小屋の教育、又蝦夷の新附民の子弟に對してさへも箱館奉行をして特に役人を派遣して德化教育を施して日本風俗に親しましめて早く皇國民の歡喜と自覺を興さしめんとしてゐるのである。かくて學校に於ける「教育」の概念も、ほゞ決

定するに至つたものである。かくて社會に於ける教育作用は教化と云ひ、學校に於ける教育作用を「教育」と云ふに至つたものである。

サテ以上「教化」と「教育」の語義の變遷及び內容の概略を述べしが、以下更に明治以後の教育を通じて「錬成」との關聯に於て考察を進めてみようと思ふ。

明治に至つては學校は明瞭に「教育」の場所と決定せられ國家の監督統率の下に劃一的の「教育」が行はるゝことゝなつたのである。而して小學校が設置せられ、小學校令が公布せられたのである。その第一條には

「小學校ハ兒童身體ノ發達ニ留意シテ、道德教育及國民教育ノ基礎並其の生活ニ必須ナル普通ノ知識技能ヲ授クルヲ以テ本旨トス」

とある。これは既に知らるる如く、其形式に於て、又內容に於て、ザクセン・マイニンゲンの國民學校の目的の規定と極めてよく類似してゐるのである。明治初年の當時としてはこれ亦止むを得ない事實であり、又それは必然的に經過せなければならなかつた道程であつたかも知れぬが、この基礎の第一歩から既に歐洲諸國に類似の形式を採つたことは今次大改革をせねばならなかつた原因を既に胚胎して居たものと云はねばならぬ。

國運の發展に伴ひ、尊き吾國史の自覺に立つて、國民は思想に身體に經濟に制度にあらゆる方面に於て大革新を要求せられ、日本國民としての根本的更生の必要を痛感して來たのである。茲にその基礎教育の劃期的變革が行はれなければならなくなつたのである。而して此度、小學校は國民學校(これは獨乙のフォルクスシューレの譯ではない)と

改稱せられ、その目的とする所も更に純日本的な獨自のものと訂正せられたのである。即ち國民學校令第一章第一條には

「國民學校ハ皇國ノ道ニ則リテ初等普通教育ヲ施シ國民ノ基礎的錬成ヲナスヲ以テ目的トス」

と定められて、茲に始めて吾國獨自の國民教育の理想が雄々しく高く掲げられたのである。勿論この間の思想の動きには歐米の自由主義的、個人主義的物質文化の桎梏を脱して、吾國獨自の宗教的香りの高い且つ道義的慈味の豐かなる八紘一宇的全體主義の精神文化の自覺への躍進がマザ〳〵と觀らるゝのである。

小學校令第一條の目的には體育德育知育が併行的に合せ行はれて「教育」の完成を意味せしめてある。而して國民としての教育も亦同時に上述の三育と同く同列にあつて、少しも吾國民としての自覺は現れてゐない。これは當時の世界思想の反映であらうと思はるゝのであつて、各國共に自由主義個人主義の思潮の渦中にあつた時代としては何の不思議もなかつたのであらう。然しかゝる思想潮流は吾が國本來の傳統的思想と根本的に合致するものでない。それが爲に歐米諸國からの强力なる思想的壓力が加はるにも拘はらず、表面上は歐米化したる點多々あつたのではあるが、何等か眞底から融合せないものが常に漂ふてゐたのである。これが滿洲事變を動機として勃發し此度の支那事變に於ては一層明瞭に活潑に活動し出したものである。

飜つて考察して見るに明治大正時代に於ける小學校の「教育」は(一)自由主義の教育であつた。個人の持つ、その力量に應じて、自由意思に從つて、何れの方向にも何れの高さにまでも進學出來うる組織になつてゐるのであつた。(二)又從來の寺子屋と異り形式上は集團的教育が行はれてゐたのではあるが、その爲に反つてその內容に於ては個人

主義的、主我的教育が施されてゐたのである。それは小學校に於ては教室の教育が主となつてゐる爲に、先生の人格と子供の人格とは直接に相接觸する機會が少く、常に具體的な生ける子供は學童なる型に於て又先生は教員なる職業的地位に於て相見ゆるのであつて、眞の人間としての人格と人格との接觸は極めて間接的な、時には全く事務的な接觸に終始することすらあるのである。かゝる機械的な劃一的教育が行はれる爲に、祕密主義の試驗制度が採用せられて、勢ひ兒童間には祕密的競爭が行はるゝに至つたのである。(三)又教室に於ては、殊に知育を中心とする教授が最も重要なる教科課程として行はれてをる爲に主知識主義的教育が旺盛になつた。(四)更に又歐米の文物の移入に急であつたが爲に、體育殊に德育を輕視した觀が無かつたとは云へない。從つて本來普遍性である知識の吸收によつて世界的思想が養成せられたのに比して、國民的體位の向上、國家的教養はいかにも偏狹であるかの如く考へられて强いて無關心の立場におかれた傾きがあつた。これらの難點はいつかは清算されねばならぬものであつた。

サテ個人主義、自由主義の文化は今や最高潮に達して、世界史上に優秀なる功績を貢獻し、偉大なる足跡を印象して、當に過去に落ち逝かんとしてゐる。今次の世界の大動亂は、正にこの個人主義自由主義の最後の苦鬪である。人類が希むと希まざるとに拘はらず、金權的資本主義、自由主義は、勤勞生產を主とする全體主義にその王座を讓らねばならぬ時になつてゐる。教育も、この世界歷史の大潮流に從つて革新が要求されてゐたのである。卽ち吾國に於ては現實日本の將來を荷ふべき兒童の「教育」は從來の如く普遍的な世界人の養成であつたり、單なる知識人の養成であつてはならないのである。具體的な日本國民の養成でなければならない。かゝる意味に於て本年二月、實に前古未曾有の教育の大改革が行はれて、國民學校令の公布となり。國民學校の開校となつたのである。而して茲に始めて從來

「教育」の文字で現されてゐた吾國學校教育に新しく「錬成」の文字が使用せられたのである。

國民學校に於ては皇國の道に則り即ち肇國の精神に遵ひ、國民たるの普通教育の基本を授け、以て日本國民としての自覺ある活動をなすに足る心身の陶冶育成を計るを目的とするものであつて、特に國民的自覺を促し、國民たるの自覺活動をなしうる心身の育成を「錬成」と云ふのである。此點は前述の如く從來の小學校教育に在つて無視されてはゐなくとも、少くとも特に重要視されてゐたとは云ふことは出來ない。寧ろ等閑視されてゐたものである。從つて錬成に於ては從來の「教育」なる語で云ひ表し得なかつた點を特に强調せんとする傾向がある。即ち

(一)今日までの「教育」は學校中心、殊に教室中心になされたものであつた。即ち一種の型にはまつた育成であり、場所が固定してゐたのである。學校を離れては「教育」は行はれないもの、寧ろ行はれ得ないものゝ如くに考へられてゐた。この考へを打破して「教育」は教室のみならず、一切の場所に於て爲さるべきものであることを示したのが錬成である。此考へを徹底せしめ且つはその效果を充分ならしめんが爲に現在に於ては「錬成」の爲に別に校外に道場を建設し、或は從來「教育」とは全く無關係とされてゐた神社、佛閣をその道場として行はるゝに至つたのである。而してかゝる道場に於て特に日本的なる雰圍氣を味ひ、世界共通の學校に於けるとは異つた國民的體驗を自得せしめんとしたものである。

(二)次には又從來の學校教育は知識至上主義であり、論理的思索に重點がおかれてゐた觀がある。從つて研究よりも記憶に重點がおかれてゐた。此弊を打破せんが爲に「錬成」は又學校に於ける教育方法と異なる方法を採用した。即ち身體の鍛錬と意志の陶冶に重點をおき、勤勞奉仕、生產作業に從事せしめて、困難と鬪ひ自己の無知を發見せしめて、

研究意志の養成に盡力するのである。或は又「みそぎ」を中心として修養せしめ、或は禪堂に至つて打坐を行じ、或は念佛堂に入りて念佛三昧、禮拜供養をなして日本的宗教體驗によつて日本人としての覺醒を促さんとするのである。

(三)更に又從來の「教育」が個人の完成を第一目標としてゐたのに對して「錬成」は完成せし個人の國家への滅私奉公を促さんとする意圖の許に行はれてゐるのである。卽ち知識の增加を計るよりもその知識の國家への貢獻を希念せしめ、身體にしても選手の養成・競技の優勝に努力せしむるよりも國家的産業に從事せしめて國運の隆盛に參劃せしめんとするのである。

(四)又從來の「教育」はとかく抽象的理論的に流れんとしたものである。これは知識を主とせる爲の知識の性質上より來る當然の歸結であつたが、それは眞の人間陶冶ではない。その爲に「錬成」に於ては具體的な全人間的陶冶を主眼とし、師弟共に作業中に融合して共同陶冶を行はんとするものである。

かくの如く「錬成」の意味は更に一段の飛躍をなして、國家的國民的訓練にその重點がおかれてゐる教育作用と云ふべきである。而してかゝる意味の教育作用は、實は今に至つて始めて行はれたのであるかと云ふに、決してそうではなく既に古く武士教育の間に、その萠芽を有するものである。卽ち武士に於ては武道の修錬の裡に、全體的なる教育を受け心身共に陶冶せられて、武士としての自覺に到達せしめられたものであつた。而して此間子弟は常に師範の人格に直接に接觸して全く個人的指導を受けてゐるのである。今の「錬成」に於てもタトヒ集團的にこれを行ふとも、教室を離れ、從來の型を無視することによつて、殊に師弟共に共同作業を爲す點に於て兩者の直接的接觸を謀らんとするものである。

要するに初めは一般に人間陶冶の意味に於て「教化」と云ふ文字が使用せられたものであるが、人間陶冶は未だ未完成であるところの子供の間に爲されねばならぬとの意味に於て、特に生長の過程にある者に對する陶冶を「教育」と云ふことゝなつたのである。然るに今やそれは單なる人間の陶冶ではなく立派なる日本國民の育成でなければならぬとの點を强調せられて特に「錬成」と云ふ文字が用ひらるゝに至つたものである。

然し乍ら茲に一つ附言すべきは、德川末期にも國民意識は極めて熾烈であつて、此時既に先覺者の藩費或は私塾に於ては國民育成の教育作用が行はれてゐたものである。但これは、從來の教育が各藩毎に種々なる學派によつて相異なる學問と修養が施されてゐたのに對し、幕末に至つて各藩の小規模の經濟機構は許されず、國內交易によつて、國內の統一經濟機構が要望せられて、封建制度は茲に中央集權制度に轉換せられんとする時代に遭遇して、この教學思想の方面に於ても、國家觀念、從つて國民として理想の人倫が要望せられて、藩民として藩學を學ぶに滿足せず、日本國民として奮起するに至つたものである。茲に皇學國學が盛んとなつて、從來の藩の教育に一大改革を與へたものである。然るに今次の國民的自覺はこれとは反對に、明治の教育があまりに世界的人類的な極めて普遍的抽象的教育であつたが爲に、逆にこれを特殊化し縮少化して具體的な人間卽ち日本國民の育成を主眼とするものである。その結果現在の「錬成」には中には少しく偏狹に過ぎたる感のするものが無いでもない。それは勿論誤りである。吾人は正しき意味の錬成が行はれて正しき意味の日本國民の陶冶されんことを切望するものである。